MEMENTO=VITA VESTIGIA VITAE

ARCHIVE
// 004

突撃兵

ディーン

Assault Trooper
Dean Calder
Age / 40

世界を守る
この想いだけは、
決して消えない

SECTOR VITA
UNDER GROUND
X - 782.51
Y - 414.62
LAST RECORD
17:00:00
SIGNAL STATUS
ALIVE



PROFILE

戦闘能力を備えた最初の託生者として誕生し、
数多の戦場で成果を残してきた存在。
セクター・ヴィータの象徴的戦力であり、勝利の
要でもある。

キャラクターブック

ストーリー （公開情報）

数百年前、アンドロイド産業は飛躍的な発展を遂げた。
開発者のアンディ博士は、人類とアンドロイドが共存する夢を見て、人間に限りなく近いアンドロイドを生み出した。だが、アンドロイドはやがて思想の違いから二つの派閥に分かれる。

人類との共存を望む穏健派と、人類そのものを否定し、滅ぼすべき存在とみなす過激派である。
穏健派アンドロイドは、人間と見分けのつかない外見、そして、共存を望む平和な意志。
彼らは人間との争いを避けるために、人類の前から姿を消した。

過激派アンドロイドは、人間の外見を捨て、強硬な意志を持ち、人類との戦争を選んだ。
激しい戦いの末、この戦争は人類の勝利で終結したと記録されている。
戦争の終結後、長い沈黙を経て、穏健派アンドロイドは再び人類の前に姿を現した。

そして 2XXX 年――人類と穏健派アンドロイドの間で、ついに正式な共存協定が結ばれた。
そして、人類と穏健派アンドロイドによる連合組織《ユニオン》が発足する。
だが、その瞬間を境に、世界は再び崩れ始めた。

協定の成立、そしてユニオンの結成とほぼ同時に、過激派アンドロイドによる全面攻撃が開始されたのだ。――敗北したはずの過激派アンドロイドたちは、滅びていなかった。
彼らは長い年月、影に潜みながら、その機会を窺っていたのだ。

穏健派アンドロイドはユニオンの一員として人類に協力し、過激派アンドロイドとの《第二次アンドロイド戦争》に突入した。その戦いの中で大量破壊兵器が使用され、地上環境は急速に汚染された。
都市は崩壊し、多くの人命が失われる。生き残った人類は、わずか一億にまで減少した。

限られた資源、減り続ける兵力。この戦争を生き延び、そして勝利するために、
ユニオンは新たな生命を創造するという選択に踏み込む。

研究施設《セクター・ヴィータ》。
そこは、ユニオンによって造られた、生命を再構築し、記憶を継承するための領域。
そこで生み出されたのは――人類の意志を宿す、新たな生命《託生者（たくせいしゃ）》だった。

登場人物　（公開情報）



統括官 / ヘクター・ソリス（NPC）：Hector Solis

人間。４５歳。男性。

セクター・ヴィータにおける最高責任者。一般的に『**統括官**』と呼ばれている。主に戦闘指揮を担い、兵士一人ひとりの命を背負う立場として、可能な限り犠牲を抑えることを責務としてきた。彼にとって、穏健派アンドロイドの生命もまた、人間と同等の価値である。しかし、人類存続のためであれば、冷酷な決断を下すことも厭わない覚悟を持っていた。



ルピナス（NPC）：Lupinus

穏健派アンドロイド。製造から数十年が経過している。女性型。

セクター・ヴィータでは統括官の補佐を務めると同時に、穏健派アンドロイド全体を束ねる指導者的立場にある。主に施設の管理・制御を担う。人類との共存を望む穏健派アンドロイドの意志を受け継ぎ、その象徴として創られた存在。

数年前に身体を損傷したが、資源不足により修復は不可能。

そのため、現在は生命維持ポッドの中で過ごしており、連絡を取る際はモニター越しに通信を行う。



研究者 / アレク・ヴァレン：Alec Valen

４５歳。男性。一人称は「わたし」

《託生者創造計画》を主導した人物であり、計画の立案から実行までを担った科学者。託生者の創造技術と倫理構築、その両面に深く関わっている。



カウンセラー / バーバラ・ロウ：Barbara Rowe

２０歳。女性。一人称は「わたし」

ユニオンの兵士および託生者の情報記録を管理する担当者。

戦闘記録や個体データの整理に加え、戦場に立つ者たちの精神を支える役割も担っている。

登場人物　（公開情報）



オペレーター / クララ・ヴァレン：Clara Valen

２０歳。女性。一人称は「わたし」

セクター・ヴィータのオペレーターを務める非戦闘要員。

戦闘能力は持たないが、統括官の指揮のもと、戦場に展開する兵士へ情報・命令を伝達し、後方から作戦を支えている。



突撃兵 / ディーン・カルダー：Dean Calder

40歳。男性。一人称は「俺」

戦闘能力を備えた最初の託生者として誕生し、数多の戦場で成果を残してきた存在。セクター・ヴィータの象徴的戦力であり、勝利の要でもある。

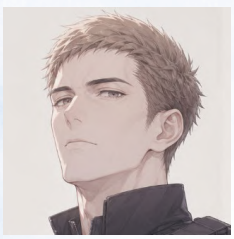


遊撃兵 / エヴァ・ソリス：Eva Solis

２２歳。女性。一人称は「わたし」

統括官の娘として生まれ、人間の兵士として前線で戦果を重ねてきた。

託生者となった後も、その選択を疑うことなく、人類のために戦い続けている。



工作員 / フリッツ・クライン：Fritz Klein

２０歳。男性。一人称は「俺」

前線で戦うことは少なく、主に偵察や潜入など、影から戦場を支える任務を担っている。その判断と行動は、多くの戦況を左右してきた。



参謀 / グレイ・ノア：Gray Noah

２２歳。男性。一人称は「僕」

極めて高い情報処理能力を備え、変化する戦場の状況に即応できる。統括官の指示が届かない現場においても、自ら判断を下し、その選択によって多くの仲間の命を救ってきた。

キャラクター背景

一面に広がる、青いネモフィラの海。風が吹くたび、花々がさざ波のように揺れていた。
その中に、ふたつの影。握りしめた手は、とても小さかった。
――ダリア。その名を呼ぶたび、胸が温かくなる。
あの日、俺はこの場所で、彼女にプロポーズをした。緊張で震える声。
それでも彼女は、泣きながら笑ってくれた。それからというもの、俺たちは毎年この丘を訪れた。
花の色が変わっても、季節が巡っても、隣にいるのはいつも彼女だった。
二人にとって、幸せは遠くにあるものではなかった。手を繋ぎ、並んで歩く。
それだけで、心は十分に満たされていた。
「ねぇ……いつか、子どもができたら、三人でここに来ようね」
ダリアは花畑を見つめながら、そう言った。それは彼女の願いであり、俺の、大切な願いでもあった。
――だが。世界は、あまりにも残酷だった。

10 年前（30 歳）
2XXX 年――人類と穏健派アンドロイドの間で、ついに正式な共存協定が締結された。
両者による連合組織《ユニオン》が発足する。だが、それは同時に、第二次アンドロイド戦争の幕開けでもあった。過激派アンドロイドとの全面衝突。多くの生命が失われ、アンドロイド同士が保有していた大量破壊兵器によって、地上は急速に汚染されていった。
――その頃からだった。妻の体調が、目に見えて悪化し始めたのは。

病院で検査を受けると、原因は環境汚染だと告げられた。
俺は、こんな世界を心の底から恨んだ。

俺は、ダリアを励まそうと、無理に明るく振る舞った。
大丈夫だ、きっと何とかなる――そう、自分に言い聞かせるように。
だが、沈黙の続く帰り道で、妻がぽつりと口を開いた。
「それとね……」彼女は足を止め、俯いたまま、指先を強く握りしめている。
「こんなタイミングで……ごめんね」震える声だった。
「私、子どもができたの」
本来なら、抱きしめて喜ぶはずの言葉。けれど彼女の瞳には、喜びよりも怯えが浮かんでいた。
「お医者さんに……言われたの。この体調で出産するのは、危険かもしれないって。汚染の影響も、まだ分からないって……」
そこで言葉が途切れた。
「こんな世界に、生まれてくるなんて……かわいそうだよね」
とうとう彼女は泣き出した。声を殺しながら、それでも止められない涙が頬を伝う。
自分のせいじゃない。誰のせいでもない。それなのに、彼女は謝っていた。

命を授かったことを、まるで罪のように。喜ぶべきなのに、すぐには言葉が出なかった。
胸を満たしていたのは、父になる喜びではない。
ダリアと、まだ見ぬ命を失うかもしれないという“恐怖”だった。

俺たちは支え合うように、統合生存圏へと向かった。
そこは戦争を生き延びた人類が集約され、生活のすべてが一元管理される場所だ。
そこで与えられた住居は、統合生存圏の内側でも比較的安全とされる区域だった。
ユニオンの方針で、妊婦や新生児は優先的に保護されているらしい。そこにいる穏健派アンドロイドたちは、祝福しているかのように、妻に優しく接してくれた。
戦闘型、生活支援型、医療特化型、それぞれ役割は違えど、皆、丁寧にダリアの体調を気遣ってくれた。
これが、共存協定によるものならば、決して悪くないものだと思える。
――だが、それでも妻の不安が消えることはなかった。妊娠は初めての経験だ。俺だって、何をどう支えればいいのか分からない。夜中、ダリアが静かに涙を流しているのを、何度も見た。

そんな俺たちに声をかけてくれたのが、とある夫婦だった。
「大丈夫よ。不安になるのは当たり前。何かあったら、すぐに呼んでちょうだい」
アキコと名乗る婦人は、出産の経験もあり、現在は三人目を身ごもっていると言った。
その笑顔は、どこか強くて、温かかった。
それからというもの、アキコさんは毎日のように顔を出してくれた。体調のこと、出産のこと、赤ちゃんのこと。何気ない会話が、少しずつ妻の表情を柔らかくしていった。

ある日、検査から戻った妻が、そっと言った。
「……女の子なんだって」
その声には、ほんの少し、弾む響きがあった。アキコさんは、ぱっと顔を輝かせる。
「あら！きっとダリアちゃんに似て、べっぴんさんになるやろね」
妻は照れたように笑いながら、お腹を撫でた。その手つきは、以前よりもずっと優しかった。
俺は、その光景を見て、胸の奥にあった黒い感情が、静かに溶けていくのを感じた。
――これは、不幸なんかじゃない。世界がどれだけ壊れていても、この命は、祝福されるべきものなんだ。
俺は、妻のお腹に添えられたその手に、そっと自分の手を重ねた。
「一緒に考えよう。この子の名前」
妻は、ゆっくりと俺を見上げる。
「この子が、生まれてよかったって思えるような――そんな名前を」
ほんの少し涙を滲ませながら、彼女は微笑み、静かに頷いた。

その日を境に、彼女が不安に押し潰されて涙を流すことはなくなった。
代わりに増えたのは、未来の話だった。
まだ見ぬ娘の笑顔を思い描きながら、俺たちは、この世界の中で、確かに希望を抱いていた。

出産を間近に、統合生存圏に穏健派アンドロイドが秘密裏に建設していた地下シェルターが人類へ提供された。地上の劣悪な環境に耐えられない人類が優先され、移住は段階的に進められていった。
最初に避難した第一次移住者は、ユニオンの人類側の要人たち。
次に、妊婦をはじめとする保護対象の集団。俺たち家族は第二次移住者だった。
それは、人口が減り続ける中で、新しい命は希望として扱われていたからだ。
統合生存圏の中心にそびえ立つ搬入エレベーターの前は、人であふれていた。
百人以上を収容できるという巨大な箱が、鈍い金属音を立てながら、ゆっくりと上下している。
俺たちは列に並び、そのエレベーターに乗り込み、地下へと降りていった。

だが、想像以上の混雑だった。シェルターへ続く通路は、冷え切った空気に包まれ、なかなか前へ進まない。隣を見ると、妻の顔色は明らかに悪い。寒さと人混み、そして張り詰めた空気が、体力を奪っているのだろう。そのとき、隣から明るい声がした。アキコさんだった。
「ダリアちゃん、大丈夫？ほら、このカーディガン掛けたげて」
手渡されたのは、虹色のカーディガン。
場違いなくらい鮮やかで、通路の灰色の光景の中で、やけに目立っていた。
「これな、ええやろ？ペアルックでお父さんの分も買ったんやけど、恥ずかしがって着てくれへんねん」
確かに、俺でも着るには勇気がいる色合いだ。アキコさんの隣に立つ夫も、どこか気まずそうに苦笑いしている。けれど、そのカーディガンの温もりは本物だった。
俺は礼を言い、妻の肩にそっと掛けてやる。
「ダリアちゃん、よう似合ってるで。私とお揃いやねぇ」
妻は小さく笑った。その笑顔を見て、俺も少しだけ肩の力が抜けた。

「それにしても進まへんねぇ……あ、あそこのカウンター見える？」
アキコさんが指差す先。通路の途中に、大きなデジタル表示があった。
「シェルター内にいる人間の心臓の鼓動を感知して、人数をカウントしてるらしいで。不思議やねぇ、どうやってるんやろ」
表示されている数字は――約三千万。既にそれだけの人間が、地下に避難しているということか。
きっと、この中に俺たちの命も数えられるのだろう。そう考えた、次の瞬間だった。
数字が減った。一つ。また一つ。
最初は気のせいかと思った。だが、減少は止まらない。三つ。五つ。十。百。
その速度は、みるみる加速していく。ざわめきが広がる間もなく、通路の奥から銃撃音が響いた。

――次の瞬間、悲鳴。繋いでいた妻の手が、強く、強く握りしめられた。
前方に待機していた移住者たちの叫び声が、通路の奥から響いた。
「逃げろぉ！！引き返せぇ！！」

その瞬間、空気が変わった。雪崩を打つように、人の流れが一斉に反転する。
押し寄せる足音。怒号。泣き声。咄嗟に動けない俺たちの横を、何人もの人影がすり抜けていく。
肩がぶつかり、肘が食い込み、身体が大きく揺れる。波は、あっという間に膨れ上がった。
そのとき、俺たちを横から強く引いたのは、アキコさんだった。
「ここの隙間に入りなさい！」
通路の壁に、わずかに開いた窪み。大人二人がやっと身を寄せられるほどの空間。
俺は妻を抱き寄せ、その中へ押し込んだ。
「あんたたち、落ち着きなさい！ 走ると危ないわよっ――！」
アキコさんの声は、すぐに怒号にかき消された。人の波は止まらない。誰かが転ぶ音がする。
「きゃっ！」女性の悲鳴。
次の瞬間、その姿は人波に埋もれた。誰も振り返らない。
銃声が、また響く。乾いた破裂音が、通路の壁を震わせる。
銃声は、確実に近づいてきていた。誰もが、後ろを見ない。ただ、前へ前へと押し合う。
やがて、逃げ惑う人の数が、減り始め、悲鳴が途切れる。
代わりに、規則正しく、重たい足音が通路の奥から響いてきた。金属が擦れる音。
そして、俺たちが身を潜める隙間の前を通り過ぎたのは――ユニオンの兵士だった。

出口の方から、もう一人。ユニオンの兵士が現れた。手には銃。
二人は短く視線を交わすと、何も言わずにシェルターの奥へと引き返していく。
その背中を見送ってから、俺は妻の手を引き、ゆっくりと出口へ向かった。

通路には、動かなくなった人々が幾重にも倒れている。血の匂い。冷たい床。踏み場のない惨状。
地獄、という言葉が頭をよぎった。――ここに留まるのは危険だ。歩みを速めようとした、そのときだった。視界の端に、鮮やかな色が映る。妻が羽織っているカーディガンと、同じ色。
「……アキコさんっ！」
妻が声を上げ、駆け寄る。だが、返事はない。
背中に撃ち込まれた銃弾の痕は、鮮やかな色を赤黒く染めていた。
「なんで……どうして……」
俺は何も言えず、ただ彼女を支えた。やっとの思いで、出口の搬入エレベーターが見える。
助かる――そう思った、その瞬間、あらゆる方位から、一斉に銃声が響く。
言葉にできない恐怖が背骨を凍らせる。

俺は妻を抱き上げ、無我夢中で走り出した。そのとき気がつく。
壁面に設置された銃火器が、自動で作動している。無機質な銃口が、ゆっくりとこちらへ向きを変えた。追尾されており、逃げ場はない。赤い照準が、俺たちを捉えた。思考が止まる。だが、足だけは止まらない。弾丸が背後で炸裂する。破片が頬をかすめる。俺は妻を抱いたまま、搬入エレベーターへと飛び込んだ。巨大な防護扉が、鈍い音を立てて動き始める。扉の影に隠れると、俺は妻を抱き込むように身を低くする。閉まる直前まで、弾丸が金属に叩きつけられる衝撃音が、何度も反響していた。

俺と妻は、生きていた。奇跡だったのか、偶然だったのか。
後に知らされたのは、地下シェルター内部の防衛システムが、過激派アンドロイドに掌握されていたこと。そして、施設内に設置されていた銃火器が一斉に作動し、暴走したこと。出口付近で俺たちが撃たれそうになったのは、それが原因だ。そして、避難していたユニオンの要人、それを護衛する兵士たち。地下へ移住した第二次移住者の多くが——ほとんど一瞬で命を奪われたという。
…だが、俺はこの目で見た。第二次移住者が、ユニオンの兵士によって撃たれていた、その光景を。

その日、三千万の生命が失われた。この惨劇は、《シェルター制御喪失事件》そう呼ばれることになった。
そして、残された人類の地下シェルターへの移住が再び始まった。
内部の防衛システムはすべて撤去され、その代わりに、入口の防衛だけが徹底的に強化された。

妻の容態は悪化する一方だった。俺はダリアの無事だけを考えていた。
結局、《シェルター制御喪失事件》で自分が目にした事実を、誰にも話せずにいる。たとえ真実を知っていたとしても、一般人の俺に何ができるわけでもない。そうやって、自分を納得させていた。

新しく与えられた居住区に入ることなく、妻はシェルター内の病院へと移された。
俺は、ただ彼女のそばにいることしかできなかった。弱っていく妻を前に、俺は何もできない。
妊娠したときにも言われていたことだ。ダリアは環境汚染により、体調を崩していた、と。
アキコさんと出会ってからの彼女は、確かに明るくなった。笑うことも増えた。
その姿を見て、俺はどこかで安心していた。もう大丈夫なのだと、勝手に思い込んでいた。
だが、決して治ったわけじゃなかったんだ。医者にも、静かに言われた。
「覚悟はしておいたほうがいい」と。

そして、出産の日。不安に胸を締めつけられながらも、俺は病室で妻と向き合っていた。
「アキコさんね、東の国から逃げてきたんだって」
唐突に、彼女はそう言った。
「いろんな言葉の意味をね……教えてくれたの。
それでね、この子に、すごく……すごく素敵な名前、思いついたんだ」

――そのとき、黒いノイズが走る。
「この子が生まれたら……“繧ｳ繧ｫ繧、”って、名前はどうかな？
“繧ｳ繧ｫ繧、”ってね……その人が大事にしてるもの、ぜんぶのことを言うんだよ」
俺は、ただ頷いた。声を出せば、何かが壊れそうだった。
俺は彼女の手を、強く握りしめる。離したくなかった。
――だが、看護師が入ってきた。危険なため、手術室での出産になると告げられる。
ゆっくりと手を離した、その瞬間。
「ねぇ……これ、アキコさんに教えてもらったの」
――妻は、かすかに小指を突き出した。
「東の国ではね、こうやって……約束するんだって」
――俺は震える指で、その小指に絡めた。
「約束して…世界を変えてほしいわけじゃない。ただ、この子が幸せになれる世界を…守って」
妻は手術室へと運ばれていった。隣には、ダリアの母親が駆けつけていた。
「きっと、大丈夫よ」
そう言ってくれたが、その声は震えていた。

俺たちは、病室近くに掲げられたデジタル表示を見上げる。
そこには、シェルター内の命をカウントする装置があった。無機質な数字。
人の命を、ただの数に置き換える光。俺は祈った。彼女の無事を。そして、新しい命を…。
やがて、数字が変わった。目の前で、一つ、数字が減った。
無機質な数字は、増えることもない。それが何を意味しているのか――思考が追いつかない。
だが理解してしまった。
それは、妻の命のカウントが終わったことを示していた。



……暗闇が続く。生きているのか、死んでいるのかも分からない。
何時間――いや、何日が過ぎたのかも曖昧だ。ただ、空白だけが残った。
記憶はあるはずなのに、その時間だけが切り取られている。
だが、ふと。小指に、かすかな温もりを感じた。
ほんの一瞬の錯覚かもしれない。
それでも、その感触だけが、なぜか消えずに残っていた。

目を開ける。そこは、家族と暮らすはずだった居住区。
広すぎる空間が、余計に現実を突きつける。俺はしばらく座ったまま、右手を見下ろしていた。
先ほどの感触、それを失いたくなくて、小指を包み込むように、静かに手を握り込む。
そのとき、奥からダリアの母親が歩いてきた。ただ、静かに確かめるように言った。
「……決意は固いんですね？」
俺は、少しだけ息を吸い込む。迷いは、もうなかった。
「えぇ。妻と約束したんです。世界を…守るって」
自分でも、途方もないことを口にしていると分かっている。だが、それ以外に進む道がなかった。
守れなかった命がある。ならば、せめて、彼女との約束だけは、守りたかった。

俺は静かに荷物をまとめ、玄関へ向かう。世界を守る。
この胸の奥にある想いだけは、本物だった。
俺は、ユニオン兵士募集のチラシを握りしめ、搬入用エレベーターへと乗り込んだ。
ゆっくりと上昇する感覚。閉じたエレベーターの中で、小指に触れる。
もう温もりはない。だが、感触だけは残っている。

やがて地上に到着すると、事前に伝えられていた座標へ向かった。
辿り着いたのは、セクター・ヴィータ。
統括官と呼ばれる男、そして穏健派アンドロイド《ルピナス》が管理する、ユニオンの研究施設だった。
既に多くの志願者が集められている。張りつめた空気の中、統括官がゆっくりと口を開いた。
「この戦争で――ここにいる君たちの多くは、死ぬことになるだろう」
それは、予測でもない。ただの現実だ。
「君たちが守ろうとしている人類の大半は、君が命を賭して守った事実を知ることはない。名も知らぬ人類のために、その代償を支払えるか？その覚悟がある者だけが、ここに残れ」
その問いは、脅しではない。試しでもない。ただの、事実だった。
だが――俺の覚悟は、もう決まっている。迷いはない。
一拍の沈黙の後、統括官が口角を上げる。
「……いいだろう。君たちの入隊を認める」

ここから始まる。軍人として。兵士として。俺は、この戦争を終わらせる側に立つ。
それが、ダリアと交わした約束を守る唯一の方法だと信じて。
それが、俺の選んだ道だった。

８年前
軍人としての訓練が始まった。俺は一般兵として、統括官の指導のもと鍛えられていた。
吐き気を催すような過酷な日々。だが戦争は続いている。
今の戦場でユニオン兵の七割はアンドロイドだ。
戦える人間の多くが、すでに死んでおり、人員不足が現実だった。
数年の訓練を経て実戦へ出る。それが、ここの流れだ。

俺たち五期生は三千人。そのうち二百人がセクター・ヴィータに集められていた。
俺は成績が悪かった。技能も知能も、平均以下。好きなのは歴史書を読むことくらいだ。
その日も、【アンドロイド暴走事件】について書かれた本を読み返していた。
そんな俺に、声をかけてきたのは、同じ五期生のケイだった。
「また本かよ。そんなもん読んでる暇があったら、少しは自主トレでもしたらどうだ？」
悔しさだけが残った。だが、反論するだけの実力が、俺にはなかった。

ある日、二百人に課された訓練。
内容は、装備 20kg を装着した状態で 30km 走破だ。
だが、途中 5km ごとにリタイア可能。それを聞き、どこか安堵する空気が流れた。

炎天下。重装備。走り出した瞬間に理解する。これは甘くない。俺は最初から最後尾だった。
5km 地点。最下位。そして 10km 地点では、早速脱落者が出ていた。脱落者が俺に叫ぶ。
「おい、無理するなよ〜。どうせ、お前が最下位なんだからさ〜」
その声を無視して、俺は走り出した。

三時間がたった。20km 地点で、半数以上が脱落していた。
「もう十分だろう」「そんなボロボロになって、いつまで頑張ってるんだ」
それでも足を止めない。25km 地点で告げられる。ケイの姿はない。きっと先にゴールしているのだろう。結局、誰も追い抜くことは一度出来なかった。……それでも、最後の 5km へ足を踏み出す。
最下位でもいい。俺には、やる理由があった。
気づけば小指を包むように拳を握っていた。
倒れそうになりながら、走る。もつれそうな足を、一歩、そして一歩前へと進めた。
そしてゴール地点へと辿り着いた。そこには九名の完走者がいた。

力尽きかけた俺を支えたのは、視察していたアンドロイドだった。それを見て、ケイが言った。
「先ほどの話なら、こいつも部隊に入るんですか？前のやつより一時間も遅れてゴールしてるんですよ？最下位でも、入れるんですか？」
その問いに、そのアンドロイドは静かに答えた。
「この訓練に、順位は関係ない。それに、最下位であるということは勝負に最後まで参加したということだ。決して、誰にでも出来るわけじゃないよ。僕の部隊に欲しいのは、自分を最後まで信じ抜いた強い意志を持つ者だ」
優しく装備を外してくれると、彼は手を差し出した。

「僕の名前は“オルター”。最近、前線部隊からセクター・ヴィータへ転属してきたんだ。実は今回の訓練で、僕の部隊に入ってくれる仲間を探していてね」
俺は差し出された手を、握り返した。そして、彼は言った。
「一つ質問させて欲しい。君が戦う理由は？」
その質問に対して、俺は迷いはなかった。
「世界を、守ることです」
その答えを聞いたとき、この場にいる者は誰も笑わなかった。
「いい決意だ。一緒に、この世界を守ろう」
差し出された手を握る。そこへ、ケイが近づいてきた。
「まぁ、なんだ…。今までバカにして悪かった。確かに、途中で諦めるような奴らより、お前の方がマシだったわ。これから、同じ部隊みたいだし……よろしくな」
不器用な言い方だった。だが、それで十分だった。
――この日、俺は入隊して初めて、誰かに認められた。

５年前
俺たちの部隊は、戦場で無事に戦果を上げていた。それも当然かもしれない。
部隊長であるオルターは、アンドロイドの中でも最高峰の戦闘技術を宿す存在だった。
アンドロイドに恐怖がないわけではない。だが、オルターは決して怯まない。
冷静で、正確で、そして誰よりも前に立つ。その背中がある限り、俺たちは負ける気がしなかった。

戦闘から帰還後、ケイが笑いながら言った。
「さすが部隊長だ。俺たちも、一緒に戦ってたんだ。この戦争が終われば、英雄として世界に名を残せるんだぜ！俺さ、小さい頃から、英雄になりたかったんだよ」
ケイは、元気そうな大きな声で喋っていた。お調子者のケイとは、今では仲の良い友人だ。
そんな、俺たちのところに、統括官と、ジェイと呼ばれる男が訪れた。ジェイは静かに言う。
「統括官、彼らの部隊なら、信用できます。きっと、期待に応えてくれるでしょう」

統括官は小さく頷いた。そして、ジェイが続ける。
「現在、セクター・ヴィータ、および他のセクターに、過激派アンドロイドへ接触する奴がいると噂が出ているんだ。規模は不明だが、もしそういった人物を見かけたら、捕獲して欲しい」
一瞬、空気が変わる。過激派アンドロイドに接触している？俗に言う、スパイだろうか。
俺たちはその情報を、任務の一つとして記憶に留めた。

３年前
戦況は悪化していた。多くのアンドロイドが犠牲になり、前線の戦力は目に見えて減っていく。
過激派の正確な戦力は不明だが、ユニオンが追い込まれているのは確かだった。
そんな中、俺たちはある噂を耳にする。《託生者創造計画》。

託生者――それは、人間の身体を生成し、心臓の代わりにアンドロイドのコアを組み込む技術だ。
コアに記録された戦闘技術を、人間の身体で再現する。
たとえ死んでも、コアを回収することで、新しい身体を生成し、再び戦場に立つことができる。
それが――託生者だった。

ケイは目を輝かせて言う。
「もし託生者になったりしたら、真の英雄になるだろう！なぁディーン、お前も託生者になったら、今より何倍も強くなれるんじゃねぇか！？」
その言葉に、オルターは静かに答えた。
「託生者……理論上は強いだろうね。だが、人間の心はどうだろう」
視線を落とし、続ける。
「アンドロイドは壊れれば修復できる。だから無謀に戦えると思われがちだ。でも、恐怖がないわけじゃない。損傷の記憶はコアに残る。繰り返される破壊は、確実に判断を鈍らせる」
オルターは一拍置き、話を続けた。
「じゃあ、人間の身体でそれを行えば、どうなる？死の感覚を、何度も鮮明に体験することになる。痛み、恐怖。再生できても、“死ななかったこと”にはならない」
そして、静かに続ける。
「僕は思うよ。託生者は無敵じゃない。むしろ、強い意志を持たない者ほど、壊れるのは早い」
誰も反論しなかった。どこかで、納得していたからだ。ケイは残念そうに、言った。
「なるほど……。その恐怖心さえ、無くなればいいのにな」
――恐怖を失った人間。それは、本当に強さなのだろうか。
それとも、何か大切なものを削り落とした姿なのだろうか。
答えは出ないまま、その疑問だけが、静かに脳裏をよぎった。

ある日、とある噂を耳にした。《託生者創造計画》の実験中に、事件が起きたらしい。
現場にいたアレクとクララが重傷。さらに、過激派アンドロイドが施設へ侵入したという話も流れていた。以前耳にした“スパイ”の噂が、無関係とは思えない。
その後、クララが、託生者になったと知らされた。……確か、まだ小さな女の子だったはずだ。
だが、クララは戦闘型の託生者ではない、と知ってどこか安堵した。

その日、俺たちは任務に出ていた。過去に崩壊した市街地。人の気配はほとんどない。
だが、そこから救難信号が発せられていた。捜索範囲を広げるため、部隊を二手に分ける。
視界は悪く、瓦礫の影が多い。互いの死角を埋めるように、慎重に進んだ。

ようやく、瓦礫の向こうに、一人の兵士を見つける。
俺は声をかけた。
「大丈夫か！こんなところで、何をしてるんだ」
兵士はゆっくりとこちらを向いた。
「……あぁ、来てくれて助かったよ」
どこか、感情の薄い声だった。
「所属は？」
ケイが兵士に聞いた。だが、目の前の男は何も応えない。
妙な違和感。ずっと一人でいたのだろうが、ひどく落ち着いた様子だ。
「お前、何があった？」
俺は思わず聞いた。すると、男は静かに笑った。
「実験されたんだ。恐怖心を抑制する調整。……戦場で迷わなくて済む」
「何バカなこと言ってんだ」
ケイが吐き捨てる。だが、男は首を横に振った。
「違う。過激派は迷わない。恐れない。だから強い。勝てる側につく。これは合理的な選択だ」
その瞬間、仲間の悲鳴が聞こえた。

周囲の建物の影から、過激派アンドロイドが出現する。男は動かず、ニヤリと笑った。
そのとき、察した。この男は、俺たちを包囲するための囮だったんだ。
もう一方の部隊がいる方向から、銃撃が聞こえる。向こうでも戦闘が起きたようだ。
そのとき、投擲物がこちらに飛んでくるのが見えた。ケイは、それに気がついていない。
「危ない、ケイ！」
俺は咄嗟にケイを突き飛ばした。衝撃。老朽化した周りの建物が崩れ落ちる。
――そして、俺は意識を失った。

……真っ暗な世界。ここは、死後の世界なのだろうか。
やがて、ゆっくりと視界が広がる。
目の前には――必死な顔で、手を伸ばす“俺”がいた。

……どうして？疑問は解けないまま、目の前の俺は口を開く。
「危ない、ケイ！」
この身体が突き飛ばされた後、衝撃が走る。
老朽化した周りの建物が崩れ落ち、辺りは瓦礫に埋もれた。
これは――俺の身体ではない。――これは、ケイの身体？

次の瞬間、彼の感情が、心に流れ込んできた。
くそっ、敵がいやがった。ディーンは、無事か！？
暗闇に目が慣れてきた頃、そこに瓦礫の下敷きになったディーンを見つけた。
だが、意識を失っている。さらに出血がひどい。時間が経てば、手遅れになる。早く……手当しないと。
必死に瓦礫をどける。その指先が擦り切れ、爪が割れる。それでも止まらない。
敵に見つからないよう祈りながら、必死にディーンを引きずり出した。
引き抜いた瞬間、分かった。ディーンの足は、無惨にもひしゃげていた。

ディーンを担いで、瓦礫の隙間から外に出る。そこには、先ほどの男が転がっていた。
だが、既に死んでいる。そして、付近には仲間の死体も。次の瞬間、機械音が響く。
「ヒョウテキハッケン。コウゲキスル」
ビームが走り、右足を貫いた。焼け切るような痛み。
息が止まり、歯を食いしばる。視界が滲む。
それでも、倒れない。必死に瓦礫を死角にして逃げた。

流石にディーンを背負いながら逃げるのは厳しい。いっそここに、捨て置けばいい。
――だってそうだろ？きっとディーンは、もう二度と、その足で立つことは出来ない。
そんな未来のない兵士に意味はあるのか。だから、こいつを見捨てることが最善なんだ。
……だが、出来なかった。

ディーンは俺にとって同志だった。
「世界を、守りたい」そんな青臭いセリフをこいつは言った。それは俺の想いでもあった。
だから、あの日こいつを認めることができたんだ。そんな仲間を見捨てることなんて出来なかった。
合流するんだ…もう片方の部隊…部隊長のところへ。戦闘音を頼りに進む。
――そして、部隊長を見つけた。

「ケイ！大丈夫か！？……っ、その傷、重症じゃないか」
「…部隊長、まだ、戦えます…。それに、ディーンだって生きています」
ディーンをゆっくりと座らせる。彼の足を素早く止血すると、銃を構えた。
だが、身体は限界だった。視界の半分が暗い。痛みで意識が遠のく。それでも、引き金を引いた。

そして、部隊長とともに、敵兵士を退けた。生き残ったのは三人。
だが、部隊長の身体も機械の部分が露出し、ボロボロで、限界が見えていた。そして、この身体も…。
「部隊長、すみません…。俺は、ここで終わりみたいです…。結局、俺は英雄になれなかった。あれだけ大口叩いて……俺、まだやれることあったはずなのに…」
悔しさから涙が溢れる。だが、部隊長は首を横に振った。
「ケイ。英雄は、自分を救えないときでも、それでも誰かを救おうとする人のことなんだ。だから、君は……間違いなく英雄だよ」
その言葉にどれだけ救われただろう。薄れゆく意識の中、ディーンの姿を見てつぶやいた。
「ディーン……俺の想い、託した…」

目を開くと、そこはセクター・ヴィータの施設内だった。
白い天井。無機質な光。さきほどの光景は、ケイの記憶だったのだろうか。
「具合はどうだ？」
声をかけてきたのは、科学者のアレクだった。俺はゆっくりと身体を起こす。痛みは、ない。
アレクは静かに告げた。部隊長が、限界の身体で俺とケイを担ぎ、この施設まで帰還したこと。
そして——俺が、託生者になったことを。あたりを見回す。だが、ケイの姿は見つからなかった。
「死んだ人間は、託生者にはできない」
その一言で、理解した。ケイは、既に死んでいたのだ。

俺は、自分の身体を確かめる。あちこちを触る。脚も、腕も、傷ひとつない。記憶の中で見た、足も無事だ。
脈はある。血も流れている。……だが。胸に手を当てる。…何も感じない。
「君は、部隊長からコアを託されたんだ」
アレクは、俺の疑問に答えるように言った。

俺は、仲間に守られて気絶していただけだった。
ケイは命を削り、部隊長は限界を越え、俺は守られた。……なのに、俺だけが生きている。
…だが、悔やんでいる暇はなかった。俺は、確かに聞いたんだ。
薄れていく意識の中で、ケイの声を。
“俺の想い、託した…”
あれは、間違いなくケイの言葉だった。

俺は、新しい部隊のリーダーに選ばれた。そして、再び戦場へ出る。
並外れた戦闘能力。自分でも分かる。これは、オルターの戦闘技術だ。動きは正確で、判断が早い。
敵は次々と倒れていく。だが、違和感があった。なぜか、”オルター"の顔を思い出せない。
まるで、そこだけ。白い霧がかかったように。何故か記憶の中でぼやけていた。

迫り来る敵。退路はない。それでも、逃げるわけにはいかなかった。託されたんだ。
俺は死ぬ気で戦い、そして、死んだ。
俺は“四度目の死”を経験する。再生成され、視界が戻る。
先ほどの恐怖が脳裏をよぎる。
死の瞬間の感触。
身体が千切れる感覚。
人間の焼ける匂い。

何度経験しても、それは忘れられない。ふと、オルターの言葉が蘇る。
“託生者は無敵じゃない。むしろ、強い意志を持たない者ほど、壊れるのは早い”
彼が言っていた通りだ。——だが、壊れるわけにはいかない。俺は、そのために生かされたんだ。
あいつらは、俺に未来を託して死んだ。だから、何度だって戦場に出るんだ。
「隊長！！！危ないです！！！！」
次の瞬間、身体を突き飛ばされる。
目の前にいた部隊員の顔が、ビームの閃光に吹き飛ばされた。

音が遅れて届く。目の前で、また仲間が死んだ。
——俺が、呆けていたから。
膝が震える。その後は、必死だった。
怒りでも、冷静でもない。ただ、失うことへの恐怖。
また、誰かを失う恐怖。そして、死の恐怖に抗うように。
あぁ……恐怖を、消し去りたい。早く、死に慣れたい。
そうすれば、迷わない。……そういえば、救難信号を出していた、あの男が言っていたな。
恐怖心を抑制する実験。あれは、なんだったんだ？

俺は、統括官のもとへ向かった。室内には統括官と、ジェイの姿があった。
だが、今はそんなことを気にしている余裕はない。俺は単刀直入に聞いた。
「恐怖心を消すことは、できますか」と。
部屋の空気が、わずかに変わる。統括官は一瞬だけ目を細めた。ジェイは、何のことか分からないという様子で、静かに俺を見る。やがて統括官は、ゆっくりと口を開いた。

「恐怖心を消す方法はある。だが、それはあまりに危険で、使用は禁止された技術だ。正直に伝えるが、これは一種の洗脳に近いものだ。その上で、覚悟はあるのか？」
…覚悟。だが、俺は止まれない。迷いなく頷いた。ジェイは、わずかに考え込むと、やがて何かを決意したように、小さく頷いた。どうやら、彼も同じ処置を受けるようだ。

恐怖心をなくすと言われた実験の日。俺はエヴァに声をかけられた。
託生者を見るのは初めてらしく、興味津々な様子だ。
俺たちは過去の任務の話をしていたが、会話の合間に、仲間たちの死が何度も脳裏をよぎった。
そんなとき、背後からジェイが声をかけてくる。俺はエヴァと別れ、ジェイの後を追った。
向かった先は、普段なら立ち入り禁止の区画へ続く通路だった。

そこには、重苦しい空気が漂っていた。室内の中央に統括官。
その背後のモニターには、ルピナスの姿が映し出されている。
ルピナスを見るのは、これが初めてだった。
「初めまして……。あなたが、あの子のコアを宿した託生者なんですね。きっと彼も、あなたに未来を託せたことを、誇りに思ってますよ」
その声は、驚くほど優しかった。胸の奥が、わずかに痛む。やがて統括官が口を開く。
「今から、恐怖心を切除する処置を行う。恐怖とは、本能に根ざした感情だ。だが、過去の記憶や経験によって、脳に強く定着していく。一方託生者は、コアに保存された記憶を参照している。ゆえに、コアの記憶に直接処置を行う。そのため、サポートとしてルピナスに来てもらった。ルピナスは、コアに保存された記憶へアクセスすることができるのだ」
「記憶に処置…？」
ピンとこない俺に、ルピナスは答えた。

「処置とは、一部の記憶を削り取ることになります。もちろん全てを削り取るわけではありません。あなたの戦う理由に繋がることも、あるでしょうから。ですが、安心してください。これは一時的な処置です。戦争が終われば、元に戻します。これは、あなたが迷いなく戦うための方法だと、私たちは判断しました」
俺は頭に装置を取り付ける。そのとき、統括官がゆっくりと近づいてきた。
「最後に質問だ…。君に、大切な家族はいるか？」

――一瞬の暗闇。
「処置は完了した。いいか？戦う理由を決して、見失うな」
俺の様子に気がついた統括官は声をかけてくれた。何か変わったのだろうか、自分ではわからない。
ただ、俺は何か大切なものを失った気がした。それは、なんだ…？

半年前

来る日も、来る日も、戦い続けた。

その日も俺は死んだ。自分が何度死んだのか――もう、数えてはいない。任務が来れば出撃する。

大きな作戦でも、小さな掃討戦でも関係ない。俺はただ、仲間のために戦った。

来る日も、来る日も、敵を殺し続けた。

その日も仲間が死んだ。だが、立ち止まる暇などなかった。悲しむ暇などなかった。

そんな暇があるなら、仲間のために一体でも多く敵を殺すんだ。戦う理由は、いつだって明確だ。

“世界を守る”。その想いだけが、この身体を動かしている。



「ディーンさん。敵は全て殲滅しました。…その、大丈夫ですか？」

通信機越しに届いたのは、クララの声だった。彼女はセクター・ヴィータから、オペレーターとして任務中の戦況と作戦を伝えてくれている。俺は、周囲に転がる残骸を一瞥した。

「大丈夫だ。統合生存圏中央の搬入エレベーターの防衛は完了した。帰還する」

その日、ユニオンが避難する地下シェルターに危機が迫っていた。だが、問題はない。

俺と仲間たちが、迫り来る敵を全て排除する。それだけのことだ。

この日、エヴァとフリッツが託生者になったことを知らされた。

３日前

統括官に話があると呼ばれ、予定より早く来てしまった。扉越しから声が聞こえる。

「……メメント・ヴィータを起動すれば、戦争は終わる。だが、その代償は――娘の命だ。今なら、君の気持ちが少しわかるよ。結局、どこか他人事のように考えていたのだろう」

息を呑む。戦争が終わる――？やがて話し声が途切れた。

俺は何事もなかったかのように扉を叩き、入室する。統括官は、いつも通りの顔だった。

「一週間後、過激派アンドロイドがセクター・ヴィータを含む全セクターへ同時攻撃を仕掛ける」

フリッツが入手した情報だという。全セクター同時攻撃。それは、総力戦を意味していた。
「……先ほどの、メメント・ヴィータとは何ですか？」
統括官の視線が、わずかに揺れる。
「……聞こえていたのか。だが、君は知らないほうがいい」
それ以上、何も語らなかった。だが――もし、あの言葉が本当なら。
戦争を終わらせる方法が、あるのかもしれない。

俺は、統括官の命令でエヴァに先ほどの情報を伝えた。
そういえば、エヴァは統括官の実の娘だ。何か知っているかもしれない。
「メメント・ヴィータって言葉、聞いたことあるか？」
エヴァは首をかしげた。
「知らないよ。何それ？」
本当に知らないようだった。だが、俺は引き下がれなかった。
ほんのわずかでもいい。手がかりが欲しかった。立ち去ろうとするエヴァの腕を、思わず掴む。
「統括官の娘であるお前も知らないのか……？」
「ちょっと、痛いって！」
自分でも驚くほど、力が入っていた。エヴァが顔をしかめる。慌てて手を離し、彼女に謝罪した。

事件当日
あれから、過激派アンドロイドの襲撃に備え、防衛体制は最大限まで引き上げられていた。
託生者の多いセクター・ヴィータでは、各セクターへ戦力を分散。
施設内には最小限の精鋭のみが残り、アンドロイド兵はそれぞれの防衛ラインへ送られていた。

ホールでは、託生者のエヴァ、フリッツ、グレイとともに、過激派の動きの想定を行っていた。
グレイは卓越した情報処理能力で、戦場にいながら的確な指揮を執ることができる。そんな彼に助けられたことは多くあった。そのグレイが、迫る襲撃に向け連携の話をしていた。ただ迫り来る敵を、薙ぎ倒せばいいだけだ。俺は考えるのが面倒で、彼らの周囲をランニングして時間を潰していた。
すると、どこからか、異臭を感じた。
「……なぁ、何か変な匂いがしないか――」
その瞬間、甘い匂いとともに、視界が歪み、思考が急速に崩れていく。俺は、そのまま意識を失った。

――どれほどの時間、意識を失っていたのだろうか。
ぼんやりとした意識の底で、施設内に響く声が聞こえる。
「ザザッ……皆さん、無事ですか？ こちら、ルピナスです。生存者は、至急メインホールへ招集してください」

過去まとめ

【10 年前】

・戦争と環境汚染により、妻ダリアの体調が悪化する。そんな中、二人の間に子どもを授かる。

・**第二次移住者**として地下シェルターへ向かうが、《**シェルター制御喪失事件**》に巻き込まれる。ダリアと共に辛うじて生還したものの、多くの人々が命を落とし、ディーンは**ユニオン兵が移住者を撃つ光景を目撃**する。だが、たとえ真実を知っていても、当時の自分には誰にも話すことができなかった。

・その後、ダリアと子どもの名前を考える。自身の死期を悟ったダリアは、「**この子が幸せになれる世界を守って**」と約束を託す。ダリアは死亡し、**命をカウントする装置の数字が一つ減る**。その後、数字は増えなかった。残された想いを背負い、ディーンは兵士になる決意をする。

【8 年前】

・**【アンドロイド暴走事件】**と書かれた、**歴史書**を読むのが好きだった。

・セクター・ヴィータで訓練を受け、落ちこぼれながらも最後まで走り抜いた強い意志を、**部隊長であるオルターに認められる**。

【5 年前】

・オルター率いる部隊で戦果を上げる。

・ジェイから、過激派アンドロイドに接触する**“スパイ”**の噂を聞く。

【3 年前】

・《託生者創造計画》の存在を知る。オルターは、託生者は無敵ではなく、強い意志がなければ壊れると語る。

・任務中、意識を失った後、**ケイの視点の記憶を見る。ディーンはオルターとケイに命を救われ、託生者となった。ディーンは部隊長のコアと戦闘技術を受け継ぐ存在**。

・死を重ねる中で恐怖心に心を削られ、やがて**恐怖という感情を消したい**と願うようになる。そして、洗脳処置を受ける。

【半年前】

・**搬入エレベーターが襲撃される事件**でも前線で戦い続けた。

・**エヴァとフリッツ**が託生者になったことを知る。戦いはなお続き、ディーンもまた前線に立ち続けた。

【3 日前】

・統括官の会話から《**メメント・ヴィータ**》の存在を知り、**それが戦争を終わらせる手段ではないかと強く意識し始める**。

【事件当日】

・ホールで仲間と連携確認をしていた最中、甘い匂いの**ガスを吸い、そのまま倒れる**。

用語解説

第二次アンドロイド戦争

現在進行中の、ユニオンと過激派アンドロイドとの戦争の総称。
百年前に発生した第一次アンドロイド戦争は、人類の勝利として歴史に記録されている。
しかし、敗北したはずの過激派は影で勢力を再編し、長い年月をかけて戦力を整えていた。
その結果として勃発した本戦争は、人類と穏健派アンドロイド双方を存続の危機へと追い込んでいる。
開戦から十年が経過した現在も、終結の兆しは見えていない。

託生者

託生者は、人為的に生成された人間の身体に《アンドロイドのコア》を埋め込んだ存在。
託生者はコアに保存された記憶や戦闘技術を再現することができる。
さらに身体が欠損・死滅しても、コアを研究施設《セクター・ヴィータ》へ回収すれば、同一の身体を再生成することが可能である。彼らは汚染された環境にも耐え、死を超えて戦い続ける。
それが、ユニオンが戦争のために創り出した“新たな生命”――託生者だった。

アンドロイドのコア

アンドロイドの心臓部には、《コア》と呼ばれる動力中枢が存在する。
人間の心臓とほぼ同じ大きさを持つこのコアは、アンドロイドの稼働と存在を支える要であり、意識や記憶の基盤でもある。
強度はあるが、銃弾以上の威力を防ぐことはできない。
コアが破壊された場合、記憶のサルベージは技術的に不可能とされている。
すなわち、アンドロイドにとっての「死」である。
――そしてそれは、コアを埋め込まれた存在である《託生者》にとっても、例外ではない。

世界規模ネットワーク

すべてのコアは誕生と同時に《世界規模ネットワーク》へ自動的に接続される構造を持つ。
これは、アンドロイドの開発者、アンディ博士によって設計された。
世界規模ネットワークとの接続は生命維持に必要な最低限の同期・維持処理を行うためのものだが、同時に、全てのコアへ干渉しうる唯一の経路でもある。
数百年を経た現在も、このネットワークは秘密裏に稼働し続けており、アンドロイドはその制約から逃れることができない。

統合生存圏

ユニオンによって建設・管理されている、人類のための巨大生存地域。生き残った人類はここに集約され、生活・生産・防衛のすべてが一元的に管理されている。しかし戦争の長期化により環境は著しく汚染され、作物の生産にも深刻な異常が生じた。地上での生活基盤は次第に維持困難となり、残された資源の大半を投入して、統合生存圏の地下に巨大シェルターが建設された。

現在、多くの人類は地上を放棄し、地下シェルターへ移住している。地下と地上を結ぶ正式な経路は、統合生存圏中央部に設置された搬入エレベーターである。

このエレベーターは地下への唯一の公的出入口であり、過激派アンドロイドから守るべき最重要拠点とされている。だが、その構造のすべてを知る者は、ごく限られている。

現在地上に住んでいるのは、過激派アンドロイドと戦うために地上に残ったユニオンの兵士。

彼らはセクターと呼ばれる拠点で生活している。セクターは統合生存圏地上部に点在し、平時は光学迷彩によって覆われ、敵からの視認を防いでいる。

そしてその中でも最も大きいセクターが託生者を生み出した「セクター・ヴィータ」である。

統合生存圏は、現在において人類が長期的に生存可能とされる、唯一の地域である。

セクター・ヴィータ

最初に建設された最古のセクター。研究棟が追加され、今の名称に変わった。

指定された座標データを用いることでのみ、セクター内部へ侵入することが可能である。

現在、セクター・ヴィータは最高責任者である統括官と、その補佐であるルピナスによって共同管理されている。セクター・ヴィータは研究セクターであると同時に、前線へ向かう兵士たちの中継拠点でもあり、各セクター（セクター1、セクター2など）には戦闘部隊が配備されている。

セクター内部は、研究区画・居住区画・医療区画・出撃区画など、明確な役割を持つ区画に分割され、厳重に管理されている。

過激派アンドロイド

もともとアンドロイドには、人間へ危害を加えられないセーフティ機能が備わっていた。

しかし過激派は、その制限を自ら排除することで、人間への敵対行動を可能にした。

その後、人間に似せた外見を捨て、戦闘に特化した身体へと再設計している。

現在の異形の姿は、対人セーフティを解除した存在であることの象徴でもある。

彼らは、通常のアンドロイドと同じく心臓部に《コア》を持つ。コアは高い硬度を備えており、刃物による攻撃では損傷を与えにくい。場合によっては、攻撃側の刃物が損傷することもある。そのため、過激派との戦闘では、コアを破壊する手段として銃弾以上の威力が有効とされる。

また、鹵獲や解析を防ぐため、自爆機能を搭載している。そのため、彼らのコアを流用することはできない。過激派は数百年前より人類と交戦を続けており、最終目的は人類の完全な絶滅にある。

STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP

次ページ以降は指示があるまで開かないでください。

STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP

登場人物　（公開情報）

アレク・ヴァレン
研究者



エヴァ・ソリス
遊撃兵



グレイ・ノア
参謀



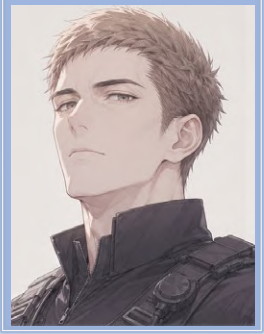
ディーン・カルダー
突撃兵



クララ・ヴァレン
オペレーター



フリッツ・クライン
工作員



バーバラ・ロウ
カウンセラー



統括官　/　ルピナス
NPC



進行（公開情報）

序幕（４０分）
- キャラクター選択
- キャラクターブック読み込み　４０分

第一幕（２５分）
- 読み合わせ①
- 読み込み　１分
- 第１セット　調査７分
- 第２セット　調査７分
- 第３セット　調査７分

第二幕（５０分）
- キャラクターブック読み込み　２０分
- 読み合わせ②
- 第１セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第２セット　調査５分＋議論７分＝１２分

第三幕（６０分）
- 第１セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第２セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第３セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第４セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 全体議論　１０分

終幕
- 推理発表（最大２分×７人＝14分）
- 投票
- エンディング